

# 日本語研修コース初級クラスにおける日本語教育実習生受け入れ —実習を生かした教育方法の開発へ向けて—

合津美穂

(信州大学留学生センター・非常勤講師)

## 1. はじめに

信州大学留学生センターでは、平成13年度前期日本語研修コース初級クラス及び中級クラスにおいて、同大人文学部開講の「日本語教育実習」を受け入れた。

本論では、初級クラスにおいて実習授業を担当した日本語教員の視点から、今回の実習生受け入れについて報告したい。

日本語学習者と実習生双方が実りある学習を行うために、実習受け入れ機関としては、日本語教育実習を日本語研修コースにおいてどのように位置づけたらよいのだろうか。

沖・合津(2001)は、日本語教室において実習生を日本語教育活動のリソース(人的資源)として生かすためには、実習生、実習指導教官、学習者、日本語教員の四者が緊密に協働することが必要であることを明らかにしている。

まず、実習生、実習指導教官、学習者、日本語教員の四者が今回どのように協働したのか、概略を整理する。本論では、特に学習者に焦点をあてて今回の試みを振り返りたい。具体的には、初級クラスの学習者に対して、実習授業実施前、実施後、研修コース修了後の計三回にわたって行ったアンケート調査結果の分析を通じ、各過程において学習者が実習生受け入れをどのように捉えたのかを観察する。そして、「実習を生かした教育方法の開発」という観点から考察を加え、今後の課題についても記しておきたい。

## 2. 実施事例の概略

まずはじめに、実習生、実習指導教官、学習者、日本語教員の四者の協働を俯瞰するために、平成13年度の実施事例の概略について簡単に整理しておく。なお、平成13年度は初級・中級クラスにおいて実習授業が行われた。以下、論者が実習授業を担当した初級クラスにおける実施事例を中心に述べていく。

### 2.1 期日と参与期間

2001年前期(春学期)

A : 学部教員養成副専攻課程 (1995 年度より実習実施、今年度で 7 回目)

\* 実習 (必修) 担当教官 1 名

B : 留学生センター (文部省措置、発足 3 年目)

\* 専任教官 5 名、非常勤講師 5 名

## 2.2 参加者

A : 実習生側・信州大学人文学部

ア : 副専攻課程学生 6 名

イ : 指導教官 沖 裕子助教授

B : 学習者側・信州大学留学生センター

ウ : 日本語研修コース初級クラス 3 名

フランス男性 23 歳・カンボジア男性 22 歳・ネパール男性 27 歳

農学研究科進学予定 2 名、工学系研究科進学予定 1 名

日本語研修コース中級クラス 2 名

中国女性 27 歳、ドイツ女性 23 歳

医学研究科研究生 1 名、交換留学生 1 名

エ : 日本語教員 専任教官 5 名、非常勤講師 5 名

## 2.3 指導目的

初級クラスでは、実習生、学習者それぞれに対して以下の指導目的をたて、実習生を受け入れた。

対実習生 :

- ① 学習支援者としての役割を認識し、行動する。
- ② 学習者心理に考慮する。
- ③ 学習者の日本語力を見抜き、それに合わせた日本語を使用する。

対学習者 :

- ① 日本語の運用力を高める。
- ② 日本語による自己開示の喜びと、コミュニケーションの達成感を構築させる。

## 2.4 実施

初級クラスにおける実習生受け入れは、以下の日程で行った。

6 月 19 日 (火) 顔合わせ (於 : 留学生センター、12:30~13:00)

参加者 : ア、イ、ウ、エ (合津美穂)

6 月 28 日 (木) 学習者主催ランチパーティー (於 : 留学生センター、12:30~13:00)

参加者：ア、イ、ウ（中級クラスも参加）、エ（専任教官4名、非常勤講師4名）の他に、留学生センター長の参加も得た

7月2日（月）事前打ち合わせ（於：人文学部、13:00～16:10）

参加者：ア、イ、エ（合津美穂）

内容：エによる指導案の提示、アによるロールプレイの考案

7月3日（火）実習授業（於：留学生センター、1・2コマのうち10:20～12:30）

『みんなの日本語Ⅱ』第33課（第11週目）

教室構成：ア（1名欠席したため計5名）、イ、ウ、エ（合津美穂）

反省会（於：人文学部、15:30～18:00）

参加者：ア（1名欠席したため計5名）、イ、エ（合津美穂）

7月18日（水）実習生主催パーティー（於：人文学部、17:00～）

参加者：ア、イ、ウ（中級クラスも参加）、エ（専任教官2名、非常勤講師2名）の他に、人文学部長及び留学生センター長、留学生課事務官2名の参加も得た

7月3日の実習授業終了後、初級クラスではプロジェクト・ワーク「日本人へのインタビュー・プロジェクト」を行った<sup>1)</sup>。このプロジェクト・ワークは、学習者自身が設定したテーマについて日本人にインタビューをし、その結果をまとめ、口頭発表するという活動である。インタビュー・プロジェクトの実施に際しては、実習生に調査対象者としての協力を依頼した。このプロジェクト・ワークにおいて実習生が参加したのは、以下の活動である。

7月17日（火）実習生に対してインタビュー調査（於：人文学部、10:00～12:30）

参加者：ア、ウ、エ（合津美穂）

\*インタビュー調査終了後、生協食堂においてア、ウ、エで昼食を共にした。

7月24日（火）発表会（於：留学生センター、9:30～12:30）

参加者：ア、イ、ウ（中級クラスも参加）、エ（専任教官3名、非常勤講師3名）

### 3. 学習者からみた実習生受け入れ

以上の活動を通じ、初級クラスの学習者は実習生受け入れについてどのような感想を抱いたのだろうか。実習授業実施前と実施後、及び研修コース修了式後に行った記述式アンケート調査結果を分析し、各過程において学習者が実習生受け入れをどのように捉えていたのか考察したい。なお、紙幅の関係上、学習者の回答の大要のみ記す。

**【事前アンケート】**（6月28日のランチパーティー後に配布、翌日回収）

- \* **実習生を受け入れることについてどう思うか**：とてもいい。大丈夫だと思う。私たちの日本語の勉強を改良することを助けると思う。勉強ももっとおもしろくなるかもしれない。
- \* **何か心配なことはあるか**：ない。知らない人達の前だと時々緊張するが、パーティーで知り合えたので大丈夫。もし問題があったら、先生に聞く。
- \* **何か意見があれば**：実習生に勉強したことを練習させるといい。こうした機会がしばしばできるか。

事前アンケートは、6月28日の初級クラス学習者主催ランチパーティー終了後に行った。このランチパーティーは、留学生センターでの日本語教育実習実施に先立ち、実習生、実習指導教官、学習者、日本語教員の四者が知り合う機会を設け、相互の心理的負担を軽減させることを目的とした。事前アンケート結果からは、ランチパーティーによって、実習生や実習指導教官に対する学習者の緊張感が解け、実習受け入れへの心理的準備が整った様子が伺える。そして、実習生が授業に参加することによって、「勉強ももっとおもしろくなるかもしれない」という期待感が高まったことが読みとれる。

**【事後アンケート】**（7月3日の実習授業終了後に配布、翌日回収）

- \* **よかった点**：とても楽しくて、効果的な授業だった。授業のスピードが速くなかったので、考える時間があり、好きだった。時間を調節することができた。実習生の学習支援は本当に楽しかった。実生活での会話のし方も見られた。
- \* **悪かった点**：ない。
- \* **実習生を受け入れることについてどう思うか**：学習者一人に二人の先生がいることはいい。大丈夫だと思うが、予定している課が終わらなくなるかもしれないことが心配。先生に教えてもらうほうがいい。何も反対はない。
- \* **何か意見があれば**：いつ私たちはもう一度一緒に勉強できるのか。他の授業でも何人かの日本人と一緒に勉強したい。

実習授業は主教材『みんなの日本語Ⅱ』第33課の学習日だった。日本語教員は実習生を学習者の学習支援者として位置づけた指導案を作成した。具体的には、実習生のロールプレイで場面を提示して新出文型を導入する、学習者と実習生とのペアワークによって談話形式で新出文型の練習を行う、学習者と実習生がグループになって教室外活動を行う、といった活動を取り入れた。いずれも、実習生を授業に受け入れることによって可能となる活動である。7月2日の事前打ち合わせにおいて、日本語教員が授業全体の指導案を実習生と実習指導教官に提示し、授業における実習生の役割について説明を

行った。ロールプレイについては、実習指導教官と日本語教員の指導のもと、実習生が場面とモデル会話を考案した。

7月3日の実習授業終了後に行った事後アンケート結果からは、学習者にとって、実習生を学習支援者として位置づけた実習授業はおおむね好評であったといえそうである。実習生参加の授業を今後も望む学習者もいた。一方、実習生が授業に参加することで一日の学習予定が消化できなくなるかもしれないといった不安感や、日本語教員の指導を望む声もみられた。実習授業を担当する日本語教員は、学習者を戸惑わせることのないようにするために、当該コースのカリキュラムを厳守すること、実習授業における日本語教員と実習生の役割を明確にし、あらかじめ学習者にも十分理解させておくことが必要であると思われる。

#### 【研修コース修了後アンケート】<sup>2)</sup>

- \* **よかった点**：6ヶ月間の中で日本語をよく使った授業だった。すごく楽しかった。実習生と友達になった。それまで話すことができた日本人は先生だけだったが、一連の活動で日本人の友達を作ることができた。実習生によるモデル会話の提示や実習生との会話練習などの教授法の選択が増えて、授業がより効果的になった。パーティーによって生活がもっと楽しくなり、また日本語を練習する機会にもなった。
- \* **悪かった点**：ない。もっと多くの授業でこうした活動が続けられるとよかった。
- \* **実習生とのインターアクションについて**：とてもよかったし自然だった。実習生と友達になれて嬉しい。実習生とは今でも連絡し合っている。パーティーや授業などでのインターアクションは本当に楽しかったし、コースにとっても有益だった。

学習者は、実習生とともに行った一連の活動を研修コース全体においてどのように捉えていたのであろうか。

研修コース修了後に行ったアンケート結果からは、実習生受け入れはコース全体においても非常に好評であったことがわかる。学習者は、実習生のコース参加によって、日本語の使用機会が増えたこと、教授法の選択が増えて授業が効果的になったことを評価している。以上の結果からは、実習生を受け入れるにあたって初級クラスにおいて設定した実習生・学習者双方に対する指導目的は、ひとまず実を結んだといえよう。

修了後アンケート結果において特徴的なのは、実習生と友人関係を結ぶことができた学習者の喜びが伝わってくることである。一連の活動を通じて、「学習者」と「実習生」というお互いの立場を超えて、人間的な出合いを果たし得たようである。

#### 4. 実習を生かした日本語教育方法の開発へ向けて

以上、実習授業を担当した日本語教員の視点から、今回の試みの一環について述べてきた。「実習を生かした教育方法の開発」という観点から、以上の実践例に考察を加え、今後の課題についても簡単にふれておきたい。

今回、実習授業自体は約2時間程度であったが、学習者と実習生がともに行った教室外活動を含めると、約1ヶ月にわたって実習生を受け入れたことになる。実習生との長期にわたる一連の教室内・教室外活動を通じ、学習者は日本語の実際使用場面を豊富に獲得することができた。同時に、学習者は実習生と一個人として出会い、友人としての人間関係を構築する機会をも得た。その結果、日本語能力の向上とともに、留学生活も充実したと実感するに至ったと思われる。

今回の試みを通じて、学習者と実習生の間に十分に教育的効果をあげうるコミュニケーションを成立させるためには一定の期間が必要となること、日本語による自然な実際使用場面が生まれるような教室外活動を組み合わせることも重要であることがわかった。学習者と実習生双方にとって有益になるような日本語教育実習を実践するには、受け入れ機関と養成機関が教育理念をすりあわせ、協働して日本語教育実習を組み込んだ日本語研修コースのコースデザインを開発することが課題となる。

#### 5. おわりに

以上、実習生受け入れの報告とともに、実践例に即して日本語教育実習を生かした日本語教育方法の開発へ向けての課題についてもふれた。

日本語教育実習は日本語教員養成において重要な位置づけを占めるにも関わらず、全国的にも試行錯誤を繰り返している。今後の発展を期して、試みの一環を報告した。諸賢のご批判をおおぎたい。

[付記] 日本語教育実習実施に際してご理解ならびにご協力下さった信州大学人文学部および同大留学生センターの先生方と留学生課の皆様、記して感謝申し上げます。意欲的に実習活動に取り組んで下さった実習生と学習者の皆さんに、心よりお礼申し上げます。実習指導教官の沖裕子先生には多くのご助言を賜り、本論執筆の機会をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

## 【注】

- 1) 「日本人へのインタビュー・プロジェクト」の詳細については、『信州大学留学生センター年報』第2号(2002年3月発行予定)を参照されたい。平成13年度後期日本語研修コースでは、人文学部日本語教育副専攻課程3年生3人の協力を得て行われたプロジェクト・ワークも実施された。
- 2) 研修コース全体に関する評価を調査したもの。実習生受け入れについても質問項目をたてて尋ねた。9月26日の研修コース修了式直後にE-mailで英語による調査票を発信し、英語による(一部日本語もあり)回答を得た。

## 【参考文献】

- 沖裕子(2001)「日本語教育学と方言学一学の樹立改変と談話研究への広がり」『國文学解釈と教材の研究』第46巻第12号 學燈社
- 沖裕子編(2001)『日本語教育研究』信州大学人文学部日本語教育学沖裕子研究室
- 沖裕子・合津美穂(2001)「リソースとしての日本語教育実習」『日本語教育方法研究会誌』Vol.8 No.2 日本語教育方法研究会
- 木村宗男他(1989)『日本語教授法』桜楓社
- 合津美穂(1997)「受け入れ教室から見た日本語教育実習」『ことばの研究』第9号 長野県ことばの会
- ネウストプニー, J.V. (1995)『新しい日本語教育のために』大修館書店